

研究主題

豊かにかかわる子どもを育む

～学び合いを大切にした授業づくり活動づくりを通して～

主題設定の理由

児童の実態と学校教育目標の具現化の観点から

本校の児童は、素直で明るく与えられた課題に対して真面目に取り組もうとする反面、指示待ち型で主体的にかかわろうとする態度が不足していた。16年度からの研究の取り組みにより、児童は、かかわって学んだり活動したりすることのよさに気づく体験を積んでおり、交流の仕方を身に付けてきている。このことをふまえ、児童の実態から課題として次のことが挙げられる。

進んで人とかかわろうとする態度を伸ばしていくこと。

話す、聞く、書くなどの伝え合う力を伸ばし、自信を持って表現する態度を養うこと。

互いの違いを認め合い、自他のよさに気づく態度を伸ばしていくこと。

めあてに向かって努力したり協力したりする態度を伸ばしていくこと。

本校が掲げる学校教育目標「人と豊かにかかわり、ともに未来をつくる子ども」は、まさに児童が主体的に対象とかかわろうとする姿を描いている。そして、かかわりを通して、自分を伸ばし協同することができる児童の育成を目指している。その過程で、自他のよさを実感した時、「共生・共育」の思いが芽生え、「次はこうしたい」「ともに～しよう」という主体的な態度が育まれるのではないだろうか。「かかわる力」は、21世紀に生きる子ども達の「生きる力」を支えるものになると考える。

今日的な教育課題から

少子化、核家族化が進む昨今、児童を取り巻く社会の中での人とのかかわりも希薄になりがちである。一方、高齢化や国際化、「バリアフリー」の言葉が話題にのぼる今日、より広い視野と思いやりの心を持ち、様々な人とかかわり協調していく力が必要になると思われる。

また、現行の学習指導要領は、自ら学び自ら考える力の育成と基礎・基本の確実な定着、豊かな人間性、健康と体力など知徳体の調和のとれた「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。さらに、これらを実現するために、個性を生かす教育や教師と児童、児童同士の人間関係、豊かな体験、家庭や地域社会との連携の大切さが挙げられている。

「かかわる力」を育むことは、人とよりよい人間関係を築く社会性を伸ばし、「生きる力」を育むことにつながると考える。

研究の経過から

平成14年度から取り組んだ「基礎学力の定着」は、子ども達に「わかるよこび」を保証するものであった。15年度の研究は、それを発展的に継続させ、「基礎学力の定着と活用をめざす学習指導～豊かなかかわりづくりを通して～」のテーマで、「子ども同士が豊かにかかわる場」の大切さを検証してきた。

これを受け、16年度から3カ年計画で、「豊かにかかわる子どもを育む」をテーマに掲げ、めざす児童像を明らかにして、児童が豊かにかかわることができるための指導・支援のあり方を探ってきた。17年度は、16年度の取り組みを重点化し、テーマに迫るために、よりよい指導・支援のあり方を探り、2カ年の研究の成果と課題をまとめ公開した。

今年度は、研究のまとめの時期である。昨年度の成果を継承し、課題解決のためさらに実践を積み、研究の充実を図っていく必要がある。

以上のこと踏まえ、上記の研究主題を、本年度の主題として設定した。

主題について

児童は、日々、様々な相手と出会いながら成長している。それは、友だちや教師、家族、地域の方々であったり、教材や地域の自然、文化などであったりする。それらとつながりをつくることが「かかわる」ことである。

「豊か」とは、かかわる対象との『出会いの豊かさ』である。それは、様々な対象と出会うことであり、出会った対象のよさにふれることでもある。また、自ら進んでかかわろうとする『主体的な姿』であり、自分を成長させ他により影響を与えるような『よりよいかかわり方』でもある。

授業や授業以外の諸活動において、「学び合い」が生まれるような授業づくり活動づくりがなされれば、児童は、目標に向かって努力したり、教え合ったり、助け合ったり、切磋琢磨したりする体験を通して、主体的でよりよいかかわり方ができる「豊かにかかわる子ども」に育っていくと考える。

様々なかかわりを通して、次のような姿が見られたとき、「豊かなかかわり」が生まれたと捉える。

「豊かにかかわる力」の育成は、「生きる力」の育成へと結びついていくと考える。

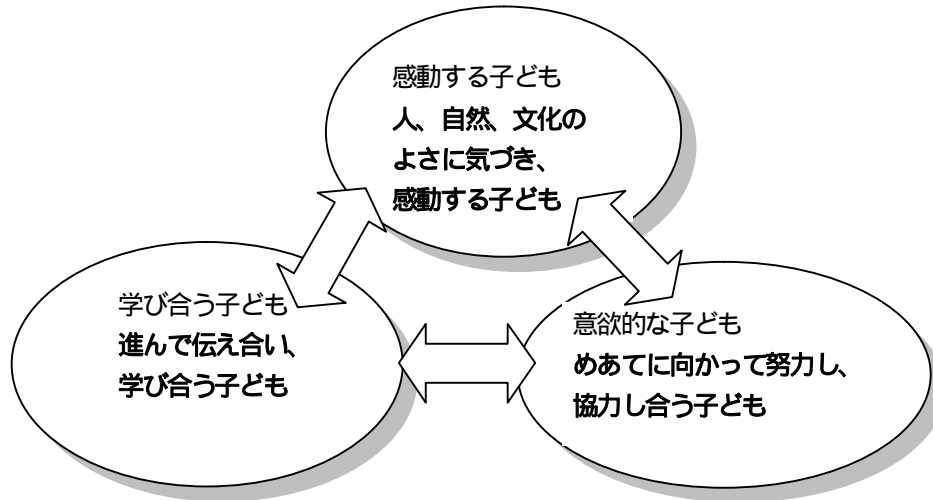
- ・ 一人一人の力が発揮される。
- ・ ものの見方や考え方を広げたり深めたりする。
- ・ 自他のよさを認め合う。
- ・ 教え合い、助け合い、磨き合いが生まれる。
- ・ とともに学び活動する楽しさやよさを感じる。
- ・ 新たな意欲を持つ。

豊かなかかわり

生きる力

めざす児童像

「豊かにかかわる子ども」を、次のように捉える。



	学び合う子ども	感動する子ども	意欲的な子ども
低学年	興味をもって聞き、 はっきり話す子ども	人、自然、文化 のよさに気づ き、感動する子 ども	友だちと仲よくし、 楽しんで活動する子ども
中学年	しっかり聞き、 進んで話し合う子ども		友だちと協力し、 めあてに向かって 努力する子ども
高学年	人の考えを尊重し、 自分の考えをしっかり 伝える子ども		友だちと協力し、 めあてに向かって 主体的に取り組む子ども

研究のねらい

「かかわり」の視点で授業改善と諸活動の再検討・再構築を行い、学校教育全体で、学び合いを大切にしたい授業づくり活動づくりを実践し、「豊かにかかわる子ども」を育てる。

研究の見通し

本研究を次のような3カ年計画で取り組む。

平成16年度 研究の立ち上げ

研究課題の把握 実践を通して仮説・重点の検討 研究の方向づけ 体制づくり

平成17年度 研究の重点化 < 市委嘱公開研究発表 >

授業づくり活動づくりの実践と課題把握 重点的な取り組みを通して仮説の検証

平成18年度 研究の充実化

教科部の取り組みの充実 地域交流の推進 3カ年を通しての研究の成果と課題の把握

研究の仮説

学校の教育活動全体において、児童一人一人の学びを育み、人や自然、文化とかがわって学んだり活動したりするよさに気づく体験を積ませれば、豊かにかかわる子どもを育成することができるのではないか。

「児童一人一人の学びを育む」とは、児童一人一人に学習や活動の目標を達成させることに加え、その学習や活動の楽しさや達成感を味わわせ、児童が、自分の思いや願いをもって**意欲的に取り組む態度を伸ばすことである。**

「人や自然、文化とかがわって学んだり活動したりするよさに気づく体験」とは、他の人と学んだり活動したりしたこと、また、その学習や活動をしたことが**自分にとってよかったと児童が自覚する**ような体験のことである。

以上のことを、学校の教育活動全体の中の様々な場面で展開することが、体験を積ませることにつながる。

研究の重点

重点1 個の思い・学びの見取りと個に応じた指導・支援の工夫
重点2 交流の場の設定と指導・支援の工夫
重点3 「話す・聞く・話し合う・書く」などの伝え合う力を伸ばす指導・支援の工夫

重点1について

児童一人一人の学びを育むためには、教師は、児童の思いや学びを見取り、変容に気づき、目標に照らして個に応じた指導・支援を行う必要がある。そのために次の点に留意する。

- ・何を、どこで、どんな方法で見取るかを明らかにする。
- ・見取ったことをもとに、個に応じた指導・支援を意図的、計画的に行う。
- ・学びや活動のふり返りにより自他のよさを表出させる。

重点2について

児童一人一人が培った力を発揮し、互いに交流する場の設定が必要である。また、その交流の場で、個の力が伸ばされ、かかわって学んだり活動したりすることの楽しさやよさを感じられるような指導・支援がなされる必要がある。そのために次の点に留意する。

- ・学習や活動のねらいにそっており、児童にとっても必要感のある交流の場を設定する。
- ・交流のねらいにそった形態の工夫や指導・支援をする。

重点3について

児童一人一人の思いや考えを持たせたり、交流の場を有効なものにしたりするために、それを支える伝え合う力を伸ばすことが必要である。様々な伝え合う力の中でも、「話す・聞く・話し合う・書く」力に焦点をあて、次の点に留意して指導する。

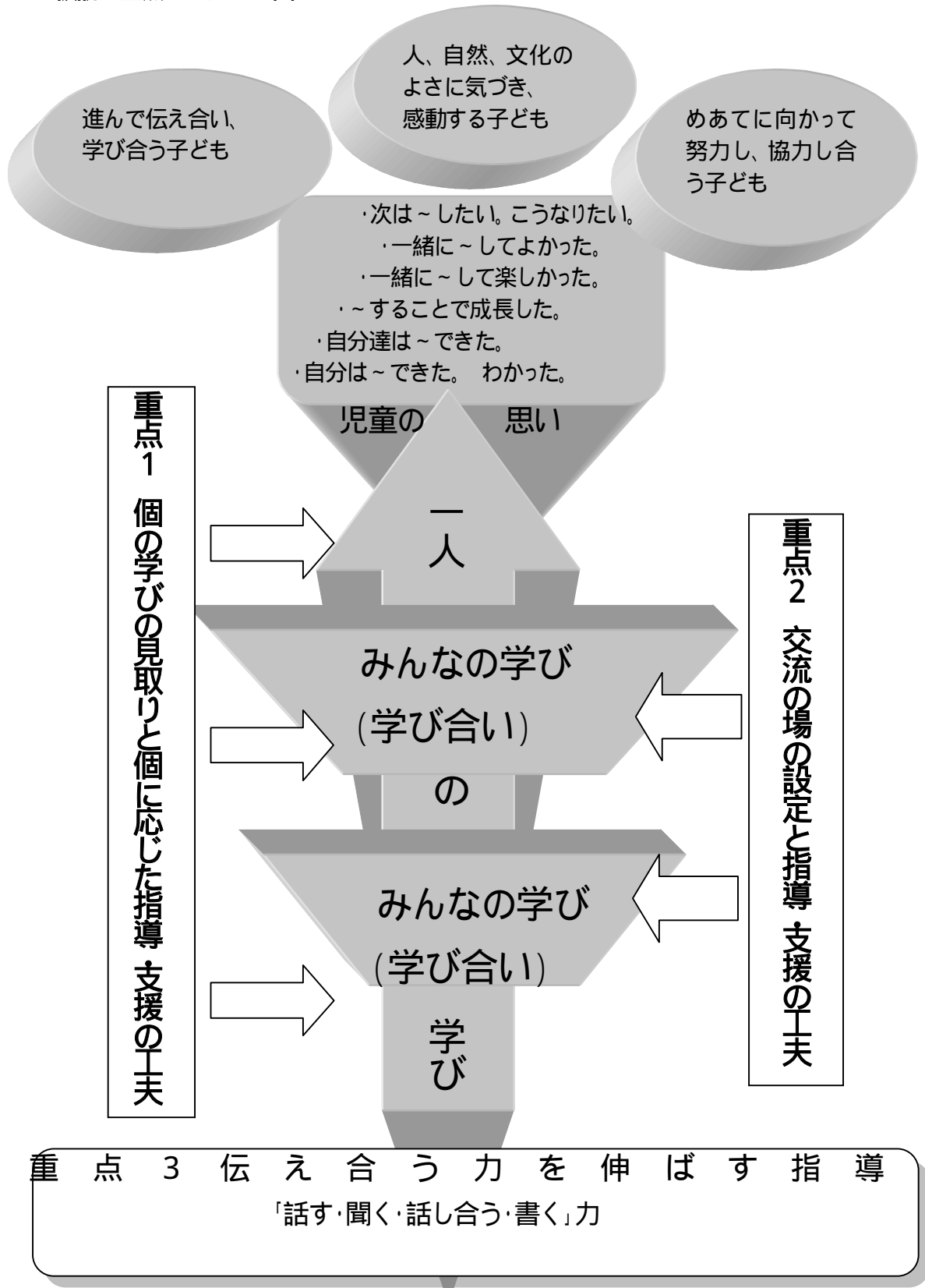
- ・児童の発達段階や実態に応じて指導する。
- ・授業や諸活動を通して日常的に指導する。

本校では、学年の発達段階を踏まえ、「話す・聞く・話し合う・書く」についてつきたい力を次のように設定した。これにもとづき、学年・学級の実態に応じ、継続的に指導することにより、児童の伝え合う力は伸ばされると考える。

<「話す・聞く・話し合う・書く」についてつきたい力>

	話す	聞く	話し合う	書く
低学年	<p>みんなに聞こえるように、はっきりした声で話すこと</p> <p>知らせたいことを選び、自分の言葉で自分から進んで話すこと</p>	<p>正しい姿勢で相手の話を終わりまでよく聞くこと</p> <p>話の大体の内容を聞き取ること</p>	<p>相手の話を最後までよく聞き、話し合うこと</p> <p>相手の話を聞き返したり自分の思っていることを伝えたりして話し合うこと</p>	<p>自分の思いや考えを文章に表すこと</p>
中学年	<p>相手や目的に応じた言葉遣いで話すこと</p> <p>順序を考えたり理由をつけ加えたりしながら、自分の言葉で聞く人にわかりやすく話すこと</p>	<p>相手の考えを自分なりにまとめながら聞くこと</p> <p>話の大事なところを聞き取り、感想をもつこと</p>	<p>相手の話の内容を受けて、話題にそって話し合うこと</p> <p>相手の話の内容と自分との相違点や共通点を考えながら話し合うこと</p>	<p>自分の考えたことや伝えたいことをわかりやすく文章に表すこと</p>
高学年	<p>目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと</p> <p>意図や根拠を明らかにして、自分の言葉で考えを述べること</p>	<p>話し手の意図をつかみながら聞くこと</p> <p>相手の考えや自分との違いを聞き取り、自分の意見をもちながら聞くこと</p>	<p>論点をはっきりさせながら、自分の立場を明らかにして考えを述べること</p> <p>話題が深まるような意見や感想を言ったり疑問点をたずねたりすること</p>	<p>目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことを筋道立てて文章に表すこと</p>

<仮説と重点のイメージ図>

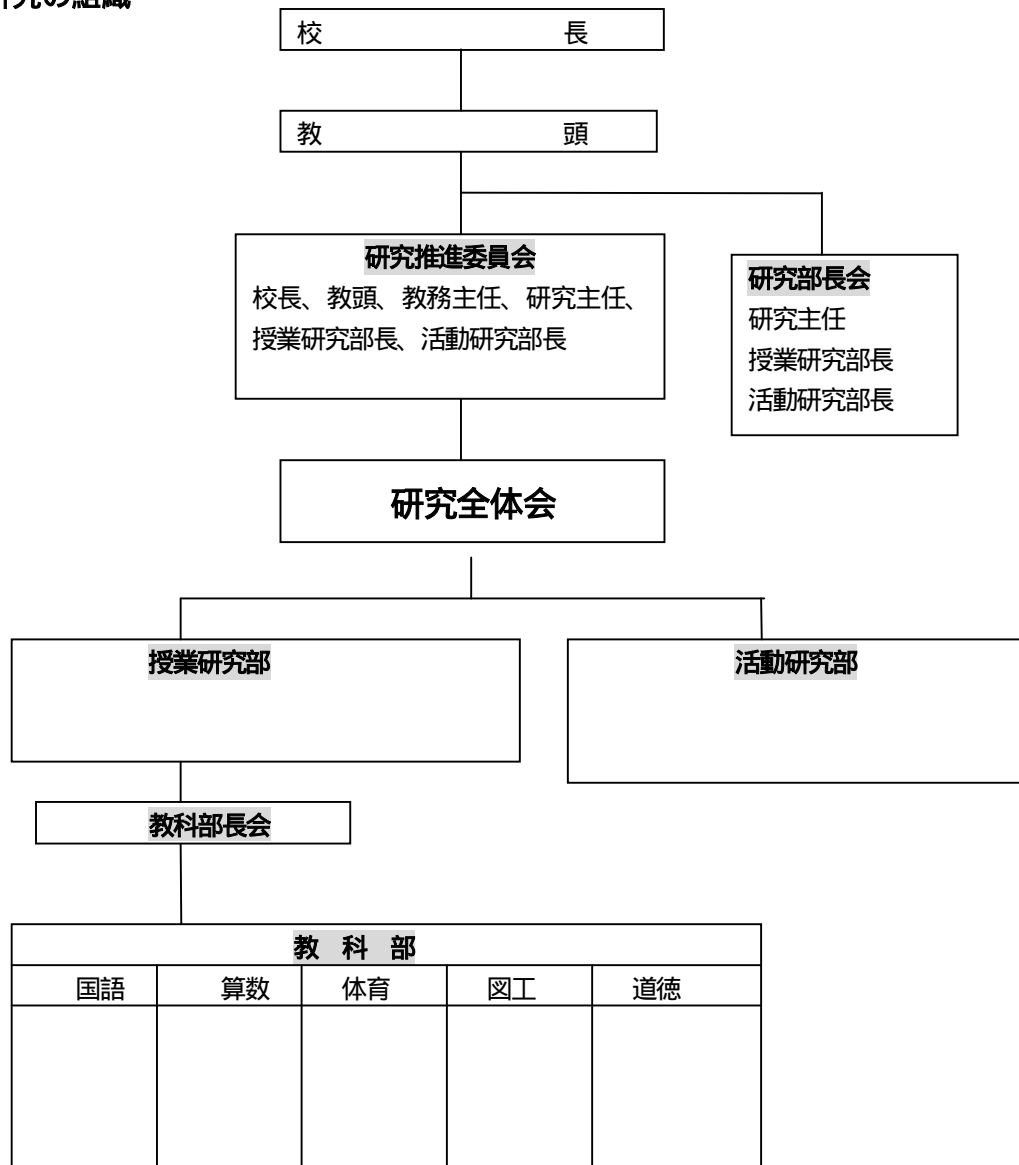


研究の内容

- 「豊かにかかわる子ども」像を具現化する。
- 実態調査及び分析により実態を把握し成果と課題をとらえる。
- 「豊かにかかわる子ども」の育成について理論的に明らかにする。
- 豊かなかかわりを生み出すための指導法について授業研究を通して検証する。
- 授業研究以外でのかかわる活動の見直しと充実を図る。
- 実践交流・現職教育・先進校視察を通して研修を深める。
- 家庭・地域との連携を図る。

10. 研究の組織と計画

研究の組織



研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の全体計画を作成し推進する。 ・実態調査と分析を行い研究に生かす。 ・研究の成果と課題を確認し研究の方向づけを行う。 ・研究実践の発信をする。 ・研究紀要を作成する。
研究部長会	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の全体計画に照らし各研究部の活動計画を調整する。
授業研究部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究（指導案の形式、授業研究の視点、事前事後研の運営）を計画し実施する。 ・「話す・聞く・話し合う・書く」などの伝え合う力を伸ばすための手だてを立案し推進する。 ・基本的な学習態度育成に関する提案をし、推進する。
教科部	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科、領域での課題を把握し、授業研究を通して仮説の検証をする。
教科部長会	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科部の取り組みを調整し推進する。
活動研究部	<ul style="list-style-type: none"> ・活動研究を通して仮説を検証する。 ・地域交流を推進する。 ・家庭や地域との連携を図る。

研究の計画

4月	12日(水)	推進委員会	
	18日(火)	全体会	
	20日(木)	研究部会・教科部会	
5月	18日(木)	教科部会	実態調査
6月	9日(金)	事前研	
	19日(月)	教科部会	
	23日(火)	校内授業研大研	
7月	18日(火)	研究部会 (12日推進委員会)	
	25日(火)	全体会	
8月	22日(火)	研究部会・教科部会	
9月	4日(月)	事前研	
	13日(火)	校内授業研大研	
10月		教科部会	
11月	8日(火)	事前研	
	17日(月)	校内授業研大研	
12月	5日(火)	研究部会 (4日推進委員会)	
	25日(月)	全体会	
1月	16日(火)	研究部会	実態調査
	30日(火)	研究部会	
2月	6日(火)	推進委員会	
	20日(火)	全体会	

< 研究の方針 > 研究の充実化（3カ年の研究のまとめ）

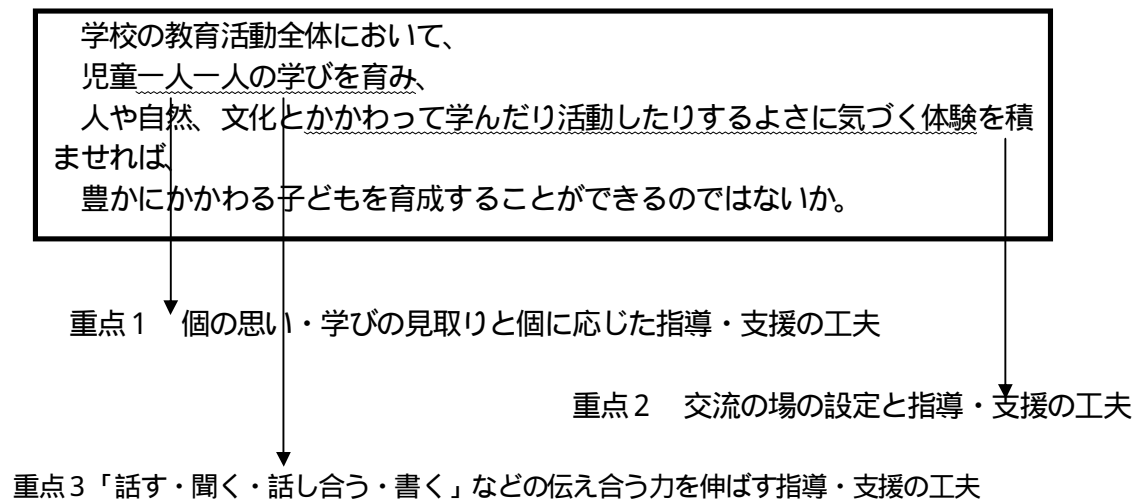
授業研究を通して、**よりよい学び合い**を生み出す指導・支援のあり方を探り、教科・領域の力を伸ばしていく。また、**実践の共有化**を図る。

活動研究を通して、**よりよい異学年交流の体験**を積ませる指導・支援のあり方を探り、**児童同士のかかわる力**を伸ばしていく。

教育課程の中で、**地域の人・自然・文化とかかわる体験的学習**を意図的に設定し、児童のかかわる力を広げていく。

日常的継続的な共通実践を通して、児童のかかわる活動を支える**伝え合う力**を伸ばしていく。

< 研究の仮説と重点のかかわり >



< 研究を進めるに当たって >

理論の見直し、整理・補充（6年間を見通したかかわる力）

実態調査の活用（学級、学年、全校の課題把握と手立て）

教科部単位の授業実践の充実（指導と評価の一体化、教科の特性をふまえた学び合い）

万世小の特色となる諸活動の充実（付けたい力の明確化。縦割活動、ハイパースポーツ）

地域交流の推進（地域の人材、保護者の協力を仰ぐ）

< 昨年度の反省より > 授業研究部

部会	成 果	課 題	共有化していき たいこと
国語	<p>考えを3回書かせることによって変容を見取ることができた。自己評価カードや学習プリントへのマークやコメントは、自信を持たせ、一人一人の見取りにつながり、自己評価の資料にもなった。</p> <p>学習の計画とかかわりに関する評価項目を入れたカードの活用をはかっている。かかわりに関する項目は、他己評価につながっている。国語のねらいにそった項目を取り入れてきた。</p> <p>学習プリントの掲示により、考えを深め、確かにしていく工夫がはかられた。全体交流の前に、自分の考えを持つために、考えを表に出す場面が何回か必要であり、その過程を通すことで、考えを深める交流になってきた。</p> <p>十分に話し合わせる時間設定のための過程や展開を組むことは、教材をうまく生かせることにつながった。</p> <p>話型の使い方により、分析したり分類したり相手を認めたり自分の考えを主張したりと、交流そのものにかかわっていた。使わせたい話型を明らかにしながら学習を進めることは、言い伝え合いになった。</p> <p>自分と同じでも違ってもお互いに認め合う雰囲気は、日常的な試みがうまく生きていくものであり、効果的な話し合いが進められた。</p>	<p>自分の考えを持つための一人学びの仕方を様々に工夫し、めあてに生かすことのできる効果的な学び方を探っていく必要がある。</p> <p>グループに分かれた場合、よりよいかかわりを見過ごしてしまうことがあった。児童相互のやりとりができるような項目を設けてみるなど、自己評価のあり方を見直していきたい。</p> <p>説明文の国語的な取り上げ方について、単元構成から吟味していく必要がある。</p> <p>書き言葉と話し言葉の違いを上手に使った指導がいる。</p>	<p>交流の場を「ふかめる」だけでなく「ひろげる」と言う考え方にたつと、授業計画が変化しておもしろい組み立てになるのではないか。</p> <p>「一人学び」を取り立てて全教科で考えてみてはどうか。</p>
算数	<p>紀要参照 加えて</p> <p>解き方や考え方を交流する場は、相手になるべく分かるように説明したり、分からないことを聞き返したりするという経験を積むことにつながり、伝え合う力を培う場になっている。</p>	<p>かかわり学び合うために必要な表現する力や聞く力を向上させるために手立てと支援が必要である。</p> <p>年間計画の中で、算数科として、かかわりを求めていく重点教材を設けていく。</p>	<p>単元を選びチャレンジカード、チェック問題を活用し、見通しを持たせ、自分の学習を振り返らせ、学ぶ力を育てていきたい。</p>
体育	<p>単元名の工夫による動機づけと意欲の喚起を行った。</p> <p>カードの活用により、思いを見取り、次の活動に生かした。</p> <p>難易度差のある技から自己選択させ、運動欲求を満たした。</p> <p>ペアを基本とした励まし合い、補助、一緒に運動する楽しさを経験させた。</p> <p>ペアとペアを組み合わせ、兄弟ペアを設定し、交流の時間を設けたことで、よさを見つける目が育った。</p>	<p>一人一人のよい動きや変容の見取りを工夫する。</p> <p>友達と交流しながら、個々の運動欲求を満たしていくことのバランスを図る。</p>	<p>準備運動から、その運動に関連したものをBGMに合わせて取り組む。</p> <p>ペアを基本とし、ペアとペアで4人グループを作るなど交流形態をとってみる。</p>

<p>図工</p>	<p>紀要参照 加えて</p> <p>4 観点のめあてをもって活動することで、めあてをもって物事に取り組んでいこうとする前向きな姿勢が育ってきている。自己評価のくり返しにより、自己を見つめる目も育ってきている。</p> <p>交流の場の設定やいいところ探検隊で、友達のよさをさがすことが、人との豊かなかわりを育てる基盤となり、互いを認め合う学級づくりにつながった。また、友達の作品からよさを見つけ出し、それを自分の作品に生かそうとする気持ちが生まれ、それが全体の質の向上につながった。</p> <p>思いをふくらませるための書く活動、工夫したことを知らせたり作品を紹介したりする伝えるための書く活動など、作ることと書くことの楽しさや喜びを連動して表現することができた。</p> <p>地域素材を教材化したことにより地域の人とのかかわりが生まれ、自分たちの地域のよさを知ることができた。</p> <p>感じたことを話す場が多く設定され、より感動したり、より自分の思いを伝えられる子どもになってきている。</p>	<p>紀要参照 加えて</p> <p>地域とふれあうより魅力的な題材を開発していく。</p> <p>自己評価カードを発達段階に合わせて改良する。</p>	<p>4 観点のめあてをもって授業をしていくこと</p> <p>評価カードを全学年分作り、どの学年でも使ってもらえるようにする。</p>
<p>道徳</p>	<p>紀要参照 加えて</p> <p>地域文化を自作教材に取り入れたり、GTを迎えるなどして授業を通して、地域や人とのかかわりを広げることができた。</p>	<p>紀要参照 加えて</p> <p>指導過程の中での手立てを検討すること。</p>	<p>紅白帽子を活用したまたは資料の分断化を取り入れた指導過程での実践。</p>

活動研究部

<p>縦割活動</p> <p>年間の流れ: 出会いの会⇒ 運動会への取り組み⇒ウォークラリー⇒チャレンジ集会⇒雪遊び</p> <p>今年度 5月、7月、11月。</p> <p>日常活動: 縦割給食、縦割清掃</p> <p>活動形態: 20班、40グループ体制</p> <p>活動のふり返り: カード、200字作文</p> <p>ハイパースポーツ</p> <p>年4回に増やす。今年度 6月、10月、12月。(時期検討)</p> <p>全校で、二つに分かれて</p> <p>ハイパーノート</p>

研究全体の成果と課題 紀要に加えて

重点1について	重点2について	重点3について
<p>教材開発や教材研究に基づく教材提示・単元計画工夫がなされた。見取りの方法の工夫と支援や補充指導。(支援表)</p> <p>個の実態や願いに応じた柔軟な学習の展開。</p> <p>ふり返えりよさを表出させ自覚させる手立ての工夫がなされた。</p> <p>意欲を高め、思いや願いを育む指導がなされた。</p> <p>自己・相互教師側の評価</p> <p>個に育みたい力を明確にする。</p>	<p>交流場面の設定が工夫され、ねらいや必要感を意識して運営されたことにより、交流することでねらいに迫ることができ、学習や活動をより豊かにすることができた。</p> <p>異学年交流を通して、生活の場面での柔軟なかかわる力を伸ばすことができた。</p> <p>交流場面での教師の指導・支援をより明らかにしていく。</p>	<p>日常の「話す・聞く・話し合う・書く」活動の中で継続的な指導がなされた。また、学級の実態に応じた指導の工夫がなされた。</p> <p>聞くことに対して、児童の意識も高く、態度も育っている。</p> <p>進んで話そうとする態度を伸ばす。</p> <p>話し合い活動で、進んで話したりよく聞き受けて返す力を伸ばす。</p>



研究仮説について

個の学びを育むことは、児童の意欲を喚起し、進んでかかわろうとする態度の育成につながった。また、交流の場を支援、有効にするものでもあった。

交流の場の設定し、運営の工夫をすることで、かかわって学んだり活動したりしたことの楽しさやよさに気づく体験を積ませることができた。そのことにより、交流の仕方を身に付け、自分の力を発揮することができるようになってきている。

個の学びを育み、交流をよりよいものにしていくための教師の指導・支援(役割)をより明らかにしていく。